

吾が愛誦句

長谷川時雨

青空文庫

六歳のをり、寺小屋式の小学校へはいりまして、その年の暮か、または一二年たつてかのお席書きせきがに、「南山壽」といふのを覚ええました。だが、この欄に書かうと思ひますのは、それよりもまた一年位たつてから書きました、

百尺竿頭更一步進

といふのでございます。これは、わたくしが、物を覚え、よく記憶したはじめての句だといつてもよいかと思ひます。字句の置きかたは、今まであまり心にしてゐなかつたので違つてゐるかもしれないが、お席書きせきがの字數が長くなつたからばかりでなく、先生からその字句の意味を口授くじゆされたのが、どこか頭にのこつてゐたのだ、と思ひます。

先生はかういひました。これは、棹がだんだん長くなつてゆくのだ。繼つぎぎ棹をだと思つてもいい。ともかく、その棹のさきへきたらば、またそのさきへ一足ひとあしでも進んでゆくことだ。いいか、棹が百尺あつて、その百尺だけあるいて、ああもうこれでいいと思つたのはいけない、そのさきへ、一足でも出てゆくのだよ——と。

わたくしの生れ育つた場所は、東京日本橋區内の中央まんなかでした。その横町に、小さい、甚だ振はない、尋常代用小學校があり、校長と、教師が一人、あとは校長さんのお母さん

が習字や裁縫を、求める人にだけ教へてをりました。いはば家族的な、私塾のやうなもので先生も児童ものんきでしたから、初春はつはるに、學校と、自分の宅うちへと張り飾る大字を、席書きといつて年末に書くのでした。十二月ひとつき一月は、月の初めから、ほかの學課はなく、その習字の稽古と、お墨摺りで日をおくつて楽しんでをりました。

子供といふものはをかしなものです。夏の日、蟬をとつてゐても、その棹の頭を見ると、ふと、

百尺竿頭更一步進

といふ句がうかび出すのです。今日のやうに楽しい郊外散歩などがない時分、父につれられて、本所や向島の釣り堀にゆきますと、わたくしなどの棹のさきへは、赤とんぼがとまつてゐて動きません。それを見てゐるうちに、ふと、思ひうかべるのは、例の

百尺竿頭更一步進

でした。わたくしは只今、みんなと日光へきて、ホテルで、あわただしい中に、この原稿の責任をはたさうとして、家にあると、手許の書籍でも引っぱり出して、もつと、氣のきいたことを述べたかもしれませんが、それには、いくらかつくりものが交りませう。只今この喧さわめきの中にあつて、すぐに心にうかんできた、この句こそ、つね日ごろ、愛誦し

てゐたとはいへないでも、心に忘れ得ず、いく分かは、今日のわたくしの、根^ねとして養つてくれた、思想の一部分であることを信じます。で、却て、こんな、幼時から忘れるでも忘れぬでもなく、はなれないであるものこそ、自分のもつてゐるいつはりのないものと心得、ぶざつながらここに小文を呈します。

（「青年太陽」昭和十年十一月）

青空文庫情報

底本：「桃」中央公論社

1939（昭和14）年2月10日発行

初出：「青年太陽」

1935（昭和10）年11月

入力：門田裕志

校正：仙酔ゑびす

2008年12月7日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

吾が愛誦句

長谷川時雨

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>